

これまでの大学体育研究を振り返る

山田幸雄¹⁾

1. はじめに

筑波大学体育センターが開学初期から発刊してきた雑誌である大学体育研究は、今年で40号を送り出すことができた。第1号の発刊は昭和54年3月であった。開学から5年が経過し、筑波大学が大きく発展していこうとする時期と重なる。

筑波大学体育センターは、開学以来、様々な角度から全学的な組織として活動を行ってきた。全学の学群生、大学院生に対して体育の授業を行うこと、学内のスポーツ施設を管理・運営すること、多くの学生が生活の一部として参加している課外活動を統括する組織である体育会に対するサポート活動を行うこと、学内の教職員の体力の維持・増進に貢献すること等、全学的な多くの役割を担ってきた。そして、これらの役割をよりよく行っていくための研究成果を発表する場として大学体育研究が存在してきた。

40号の発刊という節目ということもあり、今後の筑波大学体育センターの発展のために、一度、これまでの大学体育研究がどのような研究を行ってきたのかを、振り返ってみることは必要なことではないかと考えた。そこで、大学体育研究の第1号から第39号までの大学体育研究を概観し、大学体育研究における研究の中心は何だったのか、あるいはどのように変化していったのかを明らかにすることが、40号以

降の大学体育研究のあり方を検討する一助になればと考える。

以下、第1号から順を追って、主な研究の流れを示してみたいと思う。

2. 大学体育研究第1号の発刊

第1号から第4号までは、教員各人の研究というよりも、体育センター全体で取り組むべき大学体育に関する課題を見つけ、それについて研究するというスタイルであった。

特に、第1号では、筑波大学生の生活意識の構造、余暇活動やスポーツ活動についての選好分析、体力・運動能力の現状、スポーツ生活環境分析が行われている。体育だけでなく、筑波大生のスポーツを含めた生活全般について知ろうとしたことが伺える。また、筑波大学における体力測定データの蓄積は、大学体育研究とともにあったことがわかる。

3. 大学体育における授業改善に関する研究の推進

第2号では、高等教育における大学体育のマネジメントシステムの開発研究として、身体的データ・システム、精神的データ・システム、スポーツ施設の実態とその活用に関する研究、正課体育の授業研究と授業分析、正課体育のガイダンス・マニュアル、開設科目の指導事例を掲載している。第3号では、正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的教育方法の改善

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Science, University of Tsukuba

に関する研究として、授業研究のための支援情報システム、正課体育における自己課題化－解決法の研究を行っている。さらに、第4号では、第3号で行った研究の継続として、正課体育のカリキュラム編成体制とその具体的方法の改善に関する研究の続報を行っている。これらの内容は、授業研究の方法論、教授論的、情報論的考察にもとづく授業研究、体力の向上を志向した授業研究、運動技能の向上を目指した授業研究、習慣、態度の育成を目指した授業研究というように、様々な角度から大学体育における授業のあり方を問うた研究を行っていたことがわかる。さらに、授業研究のための支援情報として、正課体育の種目選択における動機と形態、運動能力に関する調査研究、運動生活調査研究を並列して行ってきた。

4. 体育センター全体としての研究と教員の個別研究の同時掲載が始まる

第5号以降は、体育センター全体で行った研究とともに、教員各人が行っている授業向上のための研究、あるいはクラブ活動指導で行っているコーチングに関する研究等が並列するようになった。第5号では、学生の運動生活や授業効果に関する研究と共に、体育センターに所属する教員各位が行っている科目に焦点を当てた研究論文、あるいは課外活動で指導している種目のコーチングに関する研究が掲載されるようになった。大学体育研究に教員各人の研究の成果が掲載されるのは、第5号から始まったことになる。そして、第1号から体育センター全体で行ってきた学生の運動生活や正課体育のあり方等に関する研究は、第8号をもって一つの区切りがつけられたように思われる。体育センター全体としての大学体育のあり方に関する課題研究は、ここだけはじめがつけられるが、以降も各教員が様々な形で、研究を継続して今日に至っている。さらに、第7号から第9号では、各科目の授業研究、種目のコーチングに関する研究が活発に行われた。体育センターに所属す

るほとんどの教員が、担当する科目に関する授業研究、あるいは指導するクラブ活動のコーチングに関する研究が掲載された。

5. 生涯スポーツをキーワードとして

第9号では、評論というジャンルで松田義幸先生が「生涯スポーツの振興に向けての試み－体育専門学群と体育センターの交流の促進を－」と題して、体育専門学群と体育センターが積極的に交流する必要性を説かれた。このことが、筑波大学体育の発展、ひいては日本の大学体育に重要であることを示されている。ここで、体育センターの授業に関する目標として、「生涯スポーツ」という言葉が、初めて松田義幸先生から提示された。ここから、体育センターでは、学生に対する体育の必要性としてのキーワードとして、「生涯スポーツ」という言葉が重要になっていった。

第10号では、新たな試みとして座談会の記録が掲載された。「生涯スポーツ時代に向けての大学体育の役割を考える」と題して、当時の体育専門学群長であった金子明友先生、体育科学系長であった成田十次郎先生、体育センター長であった山川岩之助先生による対談が行われた。体育科学系全体で、大学体育の役割について、真剣に考えていた時代である。大学体育のあり方は、筑波大学体育専門学群の就職先の確保と大いに関連していることも関係していたかもしれない。さらに、第10号では、再度、評論として松田義幸先生が「正課体育のためのスポーツ行動モデル」について提案されている。

第11号では、第10号に引き続いて座談会の記録が掲載された。当時の体育専門学群長である江田昌佑先生、体育科学系長である松浦義行先生、体育センター長である山川岩之助先生による「体育系高等教育機関の社会的役割－生涯スポーツ振興の研究プロジェクト構想－」についての対談であった。また、それらの内容を評論としてまとめられたものが掲載された。

このように、第9号から第11号にかけて、

大学における教養科目としての体育のあり方について、「生涯スポーツ」をキーワードに体育科学系全体で、様々な議論が行われたことを示している。

第12号では、「生涯スポーツを思考した正課体育の教育方法の改善に関する調査研究プロジェクトプログラム階層に対する教育方法の検討」、第13号では、「正課体育と生涯スポーツに関する調査報告」という研究が行われた。体育センターにおいて、共通科目「体育」に、必要なキーワードとして、「生涯スポーツ」という言葉を、どのように当てはめていくのかの研究が、体育センター全体で行われた。

6. 大学設置基準の改正と大学体育に対する影響

1991年6月に、大学設置基準の改正（施行は1991年7月）が行われた。一般教育と専門教育の区分、一般教育内の科目区分（一般（人文、社会、自然）、外国語、保健体育）が廃止された。いわゆる大綱化である。これにより、各大学は4年間の学部教育を自由に編成できるようになった。が、大学自ら点検および評価を求められるようになった。ここから、大学体育は大きな変革の時を迎えたことになる。

第14号では、座談会として、当時、副学長であった江田昌佑先生、体育専門学群長であった松浦義行先生、体育センター長であった大木昭一郎先生による「大学設置基準の大綱化にともなう筑波大学の対応について」という題材で、大学体育について盛んに議論が行われた。大綱化によって、全国の大学において体育の授業の減少が大きな問題となっていたときである。江田先生は、体育センター長も経験されていることもあり、体育センターのことを常に気にかけていただいた。今もその思いは変わらないようで、お会いすると体育センターのことを聞かれることが多々ある。

第15号では、体育センターとして、「生涯学習社会における大学体育の役割－健康科学から

自由学芸へのリストラクチャー－大学教員の生活・スポーツ・職業に関する意識調査研究－」が行われた。大学体育がどうあるべきか、どのような視点で教育するべきかという問題に積極的に取り組んだ。同時に、大学における体育の授業の減少に伴う体育教員の生活等についても検討した。大綱化による大学の体育教員に対する様々な問題が噴出したときであった。

第17号では、体育センターとして、「正課体育に及ぼす大綱化の影響に関する調査研究（第1報）」が報告されている。大綱化による体育の単位の減少が、どのような影響を与えたのかについて検討を行っている。さらに、第18号では、展望として松田義行先生が「生涯スポーツ振興に向けた大学体育の課題」という題目で、生涯スポーツと大学体育のあり方について述べられている。貴重な資料であり、興味のある方は、ぜひ読まれることをお勧めする。また、体育センターとして、「共通科目等の授業改善に向けて」のワーキンググループを立ち上げ、授業の改善に向けて報告を行っている。大綱化による大学体育の影響等について、盛んに検討した時期であった。

第19号では、資料として「大学教員の任期制について」の議論を行っている。さらに、第20号では、当時の体育センター長である森岡理右先生が、体育センターの25年を振り返って「体育センター25年」という特別寄稿を行っている。

第21号では、阿部一佳先生が「大学らしい体育を求めて－生涯学習社会における大学体育の水準を考える」と題して報告されている。初めて、大学体育の学習水準について問われた研究である。関係の先生方を含め興味のある方は、ぜひ一読されることをお勧めする。

第22号では、斎藤慎一先生が、「筑波大学1年生の食生活調査」を行い、授業だけでなく、食生活を含めた生活全般についてアドバイスできることはないかを検討した。朝食を食べてこない学生が多く問題となり、食生活のあり方に

ついて考える報告であった。さらに、第22号では、森田啓先生による「大学体育の意義・役割に関する一考察」、第23号では、田崎健太郎先生による「大学体育の設置基準の規制緩和を巡る議論に関する研究」というように、大学体育のあり方を問うた研究も継続された。また、第23号では、授業報告というジャンルで、教員が行っている授業の内容等について、学術論文とまではいかなくても研究に近い形でまとめるということが始まった。

7. 多様性の時代

第24号では、特別寄稿として、棚次正和先生による「哲学と体育－人体と天体の円運動」、長きにわたり共通科目「体育」にご協力いただいた佐藤成明先生による「剣道実習27年を振り返って」、独特の理論で授業を行われた坂田勇夫先生による「私の水泳授業」が掲載された。それぞれの先生方の個性あふれる文章である。ぜひ、ご一読いただきたい。

第25号では、高木英樹先生による「TWINSとWEBサーバーを連携させた共通体育のファカルティディベロップメント」という報告が行われた。大学が導入したTWINSと体育センターのWEBをうまく連携させて、体育の授業やレポート等に関する学生との連絡に利用できないかということを検討した。現在のWEB等を利用した体育センターのあり方の流れの始まりの報告であった。

第26号では、松元剛先生による「筑波大学大学院体育の現状について」が掲載された。日本でも例を見ない大学院生に対して体育の授業を始めるという画期的な出来事の状態について報告したものである。現在の大学院体育の充実のためにも貴重な資料である。

第29号では、筑波大学に來学されたジャック・ロゲIOC会長がお話しされた「オリンピック・ムーブメントとアカデミーの役割」についてまとめたものが掲載された。本当に貴重な講演であり、体育系の先生方は、一度は読んでお

くべきではないかと考える。

第31号では、特別寄稿として白井久明先生による「セクシャル・ハラスメントの法律問題」についての講演が掲載された。現在でも重要な問題であるハラスメントについてであるが、当時、大学でもハラスメントの問題が重要視されてきた時期であったように思う。現在でも重要な問題でもあるので、一度、読まれることをお勧めする。また、第31号では松元剛先生による「オハイオ州立大学におけるDepartment of Recreational Sportsの運営について」が報告されている。さらに、第32号でも松元剛先生は、「オハイオ州立大学における一般体育の現状と学生競技者に対する大学体育局の学業支援について」が報告されている。現在、文部科学省、スポーツ庁で盛んに叫ばれている大学スポーツの活性化について書かれたものである。松元先生は、かなり前から大学スポーツの変革の必要性を唱えられていたことがわかる。

8. 科研費による全体研究、大学体育研究のオープン化

第32号から第36号では、体育センターとして獲得した科学研究費である「知の競争時代における大学体育モデルの再構築に関する実践的研究」が継続的に行われた。体育センターの教員が3つのグループに分かれ、それぞれのグループで研究を推進した。大学体育の基本理念、カリキュラムのあり方、成績評価等について、様々な議論を経て、多くの提言を行うことができた。現在まで、体育センターでは、この結果に基づいて学生、大学院生への体育の授業が行われている。また、第36号では、Tsukuba Summer Institute (TSI) に関する活動報告が行われている。TSI活動において松元先生が始められたオハイオ州立大学との関係は、筑波大学においてもこれからの重要な活動に位置付けられている。更なる発展が期待できる分野といえる。さらに、第36号では、広く学外からも論文投稿を受け付けることになっ

て、初めての論文が掲載された。それ以降、学外からの投稿が継続されている。今後、大学体育研究が、日本の共通科目「体育」を発展させていくためには、学外からの投稿がさらに増えていくことが望まれる。

9. まとめ

大学体育研究 40 号の発刊に際して、これまでの大学体育研究の大まかな研究の様子を見て

みた。体育センターとして教員がまとまって研究を重ねてきたことがよく理解できる。共通科目「体育」の今後を考えると、体育センターの教員がまとまって、様々な研究、授業のあり方等について、常に議論を深めていくことは、重要な意味があると考えられる。

大学体育研究の更なる発展を祈念して、筆をおきたいと思う。